

(第3種郵便物認可)

人生讃歌 北国のぬくもり

小檜山 博 著



河出書房新社・1800円

こひやま・はく
37年生まれ。『光る大雪』で木山捷平文学賞受賞。『漂着』ほか

それぞれの記憶を呼び戻す匂い

このエッセイには匂いがある。それは決して香りではない。北海道で特急列車に乗ると車内誌で著者のエッセイ「人生讃歌」に出会える。本書は、これをまとめた『人生という旅』『人生讃歌』『人生という夢』に続くシリーズ4冊目の単行本。読むたびになぜか匂いが漂って

てきて、読む人それぞれが自分の記憶を呼び戻す。決して光り輝く思い出ばかりではなく、恥かしい記憶もよみがえる。第一章「故郷という原点」では、故郷の貧しい日々、父母、兄弟の匂い、友の汗や教師の顔が頭をよぎり、彼らの声が聞こえてくる気がした。

第二章「生きるということ」からは酒やラーメンの匂いが漂う。ここでも汗の匂いがするがそれは主に冷や汗だ。若さゆえ、貪しさゆえ、「何もかもに向かって…激怒をおぼえた情熱と軽薄さが、とてもなつかしい」とある。

第三章「人生という宇宙」では、世界中を巡る旅が描かれる。著者は、「旅の目的はその場に身を置くこと」と悟り、いろいろな土地で心豊かな庶民と出会う。その笑顔の中に、これまでの自分自身の人生を見いだしているかのようだ。

8年前、著者の故郷北海道滝上町オシラネップに「小檜山博文学碑」を訪ねた。鳥の声や川のせせらぎを聞きながら土の匂い、草の匂いを感じ、これが『風少年』や『雪嵐』の原風景かとしばらく動けなくなった。傍らの「ほくの根っこ」と記された著者の挨拶に、「滝上はほくの人生と魂の故郷だ」とあった。

このエッセイの原点の一つが小学校2年生の時から書き続けた日記だと言う。両親はいつも畑仕事で家におらず、いじめられたり褒められたりしても話す相手がいないので自分の思いを文字に託した。だから日記には事実だけが書かれている。残念ながら気軽に旅を楽しむ環境ではない今こそ、本書で、匂いを追って過去を振り返り、そして未来を模索する旅をしてみたい。